



重修真書太閤記
二編
五

13
459
15



柳菴并栗原氏校訂

重脩 真書 太閤記 貳 卷之十一

東都書肆 知新堂



重修真書太閤記二編卷之十三



秀吉謀て西方三人衆を招く事

并 稻葉氏家安藤等帰伏の事

永祿六年の冬木下藤吉郎秀吉西美濃三人衆稻葉伊豫守安藤伊賀守氏家常陸介等を味方とせん先此より種々工夫廻らして居りたるが竹中重治と三人衆と入魂をよみて城探り知れぬらち重治は此事を談じけむに重治いよく某が此處に罷在るとい止城を得たる深義あり故をよむと他人ハやと如何なる所存あるら此此乃人情をうらむし三人の輩ハ三人の所

特 13
門外
459
15

大目録二編卷十三

存のべく只く公乃り秘く練熟なりし智計を以て招くべし一人來らば二人ありは同心を謀といふ乃りきて偽あり偽を以て實城鉤を智と云あり公乃智みく招き玉をるに來らばといふことわづらひ此事某がやに及ばぬといひ計畧は方便一言城を發せば木下は汝がの智者なるを忽ち其の意城了り再び相談及む

齋藤道三乃妻の稻葉伊豫守貞通乃姪あり竹中重治の母を伊賀守範俊の女あり氏家常陸介は稻葉竹中と通家なるが故に重治は乃謀み與り

秀吉急度思案し右筆城呼出し竹中重治の午跡を似せて書簡成作らし三人の使者み一通けり持せて三人衆乃許へ遣はしけるは竹中が私乃使者のありみて書簡ふに重治州乃股の城中に移り住せども織田家へ降参せしは乃國乃乱城はけし身を安ん送りしが其のありて當國乃容子城伺ふに齋藤家乃滅亡遠わらば大度傾く一木乃支ふる所ありは乃方々ふも其の御心得あるべくは何れも國中の民ども城無益の合戦み苦しよきはるやうの御計あり然又此國と切取ん大將軍と織田信長とあり信長の軍立尋常とありは乃時聞しめし事もいへば眼前見

毛一ぬていもう一際ひとの勇將ゆうしやうのぬらむれくひとこの洲
の股またある某それが閑棲かんせいへは越こりまうし木下きのしたが軍配ぐんぱいふと御
覽らん毛もうゆづ某それがやうこの偽いつはりあるぬとも知し召めへくると細
やうみわくせうう三人衆さんにんしゆの許もとふくひ書簡しよかんをひらきとて
重治しげちがゆゑにその理明りあきらうりて別わかり然しかぬべし異見いけんも
まろく兼かて齋藤家さいとうけの仕置しあきは疎居そゐううし所ところが若年
より智者ちしやと云いぬ重治しげちが勸すすむる所ところ疑うたがふ處ところふゆらば
とも一人ひとりぬて決定けつぎやうをんともいふゆありわふとくは
稻葉氏家いなばぢけが心中しんちゆういうみやとわりのみ処ところ氏家ぢけ稻葉いなばと伊賀
守しと語合ごごあうせんせんと出来いり三人さんにんひとしく額ひたいを集あり
て同おなく竹中たけなかが書簡しよかん紙出しでし如何いかにもふとと讀合よみあはれば

同おなく文章ぶんぢやうぬて手跡てしを正ただしく重治しげちの自筆おのづか露つゆを疑うたふ處
き所ところふし三人さんにんひとしく手紙てがみ拍うく去い乃のち上の三人さんにん諸共
洲しゆの股またみうう竹中たけなかみ對面たいめんして面上めんじやう意趣いそを聞きるこま
りと使者しやみ返事へんじ紙しとをささしを打連洲うちれんしゆ乃股のまたへを
いとぎりる

永祿四年二月竹中遠江守重元しげもと六十四歳むそくじゆぬて卒すまし重治
十八歳じはちさい家督けとくして菩提寺ぼだいじの城主じやうしゆとあり同おなく五年
齋藤龍興さいとうりゆうけいと怨うらむことありて弟あに乃久作のひささくと共に郎從
合あせき十七人の勢せいぬて稻葉山いなばやまに襲取しゆうと齋藤飛彈守さいとうひだんし
を切殺きりころし龍興りゆうけい追出おひだし織田殿おだの此由このよし聞きく其
地ち叅まゐらせふは美濃半國みのはんこくを賜たまはると仰おほせし

我生國を他國の人も参らせし所領多く得んと本
意を以て然らざるもの外祖父伊賀守範俊
が扱ぬより城をば龍興に返し我身の江州へ立退
と云此れど乃と改正しく見ざる伊賀守範俊は
重治が旨に信ぜしあり

木下ハ先達く使者の返辞を聞きて一今やくと待
所へ三人打連く入來り竹中み對面せんことを謁木下り
秘く謀りしことをさへ城門を開きて北に請於三
人衆不審なるが少くも屈する色なき城中に入らば
淺野長政出迎へ本城に案内し三人衆いりある故と
さへはさし知事乃淺野が行りつれ進み行を

木下自出迎ふ態勤且禮儀あり其の當城を預る尾州
侍の藤吉郎とゆゑのみ三人衆乃功名の兼に聞及びよ
きもの慕はしく存し所竹中重治乃折り出らる言
葉に就く益、武功乃香たしくいり其の見衆に對する
もやと心み掛りひひと重治より音信きて今日當城に
入來あるべしよ承り及び何れ苦くいふと此方へ入ま
いりて斯く迎へたりしぬりとゆふより三人
衆も心得ざるがう角のさみゆりさき先相當
の答禮もとや然中ける竹中乃書状よりて我に三
人打連く参てはあり然るに計らず木下殿に見えぬ
しと所望乃外の本望もさし始り心ざし参

り〜重治み面會し〜後猶又中入屋さ〜と毛ゆ〜や
 竹中〜引合せ玉さ〜と中〜木下答へけ〜其
 と〜重治〜三人衆近〜入來〜とて此〜
 用意〜し〜は〜と毛ゆ〜今朝急〜清洲〜
 上り〜引違ふ〜入〜と毛ゆ〜一通を〜置〜其
 中〜と某〜吳〜頼置〜とて一封乃尺素と出
 て三人衆〜は〜や〜見〜に當城
 は〜越〜上〜木下と共〜清洲へ御越〜萬事
 を清洲〜意得〜と書〜木下〜の由〜見
 て思慮深〜重治の計らひ〜實〜然〜故〜

其〜は〜爰〜一二〜も益〜と〜木曾
 川の川獵〜い〜せ〜導引〜ヤ〜
 一〜先〜休息〜と〜兼〜用意〜
 所〜善哉盡〜美を調〜饗應〜
 三人衆も思ひ乃外のと〜
 る〜木下〜心を用ひ懇〜取〜け〜敵味
 方乃も〜も〜と酒の〜飯喰木下
 が主振ふ〜成〜然饗應を徹〜
 立出〜先導〜と〜三人衆も重治と
 應對〜のち秀吉見參〜其乃振〜
 △と〜ひ〜の荒増〜清洲〜竹

中み面會し今朝より乃始中終を語り尾張と合躰を
を爲しと三人ひとしく決定せしとあるは木下み打連
之洲乃辰川とて清洲み趣をける此時木下使者我清
洲へもしらせしと告始末を告りしはとみ清洲みも
其乃用意とをせしと待居より三人衆は木曾川を打より
尾張乃國み入行の程を清洲とつとよりしと正しく織
田殿と弓矢我取しといはるるも美濃と尾張ハ久し
敵國なる上我等三人ハ敵み取るも由、敷そのをせし
其は我何の用心もぬく居城乃内まぐく入込せし織田
殿の心ひろさよと心乃底み甘心しるる流石敵國乃
城中をまじし聊猶豫しける所へ木下案内みより城中

より使出来り重治通をせしとありて三人衆をよび
参らせまじし待付をたみ及をを爰まぐく罷越てはし
洲の股より重治を尋ねて来る人あり竹中が休息所
はる案内中せとめしとみさしと云みより木下三人衆を
伴ふて本丸み登り重治が休息所とつみしるる其乃体
いりみも奇麗みして織田殿乃書院の内とまじし乳より
彼は見廻し座み着るる若殿原出さる茶を
點し黒心我勸む三人共み茶我喫し終るは木下
近習諸士我尋ねて竹中主みちやく三人衆参向
乃より我告めし速み面會の様中次給ひしとありし
かばり次りしとありし奥み入頓く立出の様重治ぬは

三人衆乃越おきしと待つびあひしと定めて路
 次よて猶豫をしりぬらん行逢所はぐ行く見た
 やとて只今乃名を立出さひしありをぐく帰るふ
 一暫時休息をすといふと云て引入る木下あれを聞さ
 べく彼是と間違はるゝとの氣乃毒はるや獨語所へ
 中次立出木下殿殿乃召せよと疾に参り所をいしと
 勸むる故木下三人衆之理城のべと奥へ参上引違へ林
 佐渡守佐久間右衛門尉兼田權六郎坂井池田森不破梁
 田乃向し一同出來り三人向ひ禮をさすわめく名
 代調り竹中重治より三人衆のと委碎し中は是し
 う信長も日比の所望叶ひしとて大に悦喜思ひし

只今見入るべし我等も信長乃旗本乃足輕預るも
 乃みゆされよりのち見知せよと方中合とさし
 ちば辱るべしといへば三人乃革ふて驚懼し織田
 殿の旗下に属せんといひての本意あぐる重治の面
 會し手續を定めよとのち免も角もと覺悟せしと
 居るを鷲の背と譬違ひし胸うち騒がてのち
 所へ中次まゝ立出此方へといひて跡を從て進む
 不どろ織田殿例より毛簾くしく装束して禮式正
 しく對面より三人衆一同小着座をさし織田殿宣ふ
 様美濃國みく土岐齋藤氏除く御邊等の右に出る

多の聞毛及々次弓矢乃名譽も代々日記に傳ふれ
さい傳毛の對面して語り合ふと願ひし此程
はくく治重治乃噂みく此邊はく入來りて由を
知てかくハ計らひしあり抑齋藤龍興乃政事みど
之國人等み疎まれ民百姓困窮たること其哀をむが
故みちれを援らんたりみ馬代出して度々堺目り
く合戦しけるふ大澤次郎左衛門尉竹中半兵衛尉
ちど先達く當方み隨從せり其乃ら竹中周旋み
て御邊等今も其と一城み集會ありしつふら
りて後濃州靜謐の計策とありしと懇みされ
しよりり三人衆のべと辞もなき仰畏入り竹中

大澤と評議仕りその時節を見合せ御出馬に請り
濃州平均の謀れりししひべと旨に答りけるは信
長大に悦びる種に乃引出物引を饗應りけり
み降参乃名もきつえはして美濃尾張自然空合
体みありけると偏み木下が智計といひ川原
織田家譜に永祿七年美濃國士氏家常陸介ト全
稻葉伊豫守伊賀伊賀守號西方三人衆叛齋藤龍
興應信長とあり此後乃ことあるべし
三人衆もそと絶く安堵乃わめひをよし秀吉と
同道して洲の股み帰りき道きわく竹中が尋ね
はきとえ終み逢くとゆく洲の股に歸り着木下竹中

大問言一終卷一三
み對面一西方衆味方み届一之爰み来りて故同
道み之清洲み參向一織田殿乃見參み入之者今
あつり歸り来きり其の方便某方寸より出り
祿ども實ハ此邊乃右筆をかりりりと有のちにど
語りける竹中おれを聞之間おれ以之敵をとりふと
軍者乃常形り我何ぞおれを恨むる彼人、来ら
面會して御邊乃術を助へ一心安く思ひあつと云
一不ぞみ氏家稻葉伊賀守うち何れを竹中が閑室
み入之對面一二人等一く中様御邊乃書翰ふて
我等故招のせよふ懇といひ其の理も、明白おれ
は當城へ參向せ一所御邊留守みとららば木下殿

み面會夫より又御邊乃導引みまうせ清洲へ罷向
ひのむ一御邊といひ引違ひなきらりおれは織
田殿乃家老衆と對面せ一のちおれら殿み見參し
數多乃引出物賜たり終み濃州平均の約束まで
して只今罷歸る處みよのちおれと御邊と打合せて
返答ふしなむと存せ一お行違ひ一らを面
私み計らひしと返すも、毛遺恨といつと
聞之重治打笑ひ我當城へ移し一と全く濃州の民
を安樂みよふ為乃本意おれははらうり此詞乃
行違ひ何り苦一りる處おれと更り他乃とに及は
はらりて三人衆も木下の謀とは心付ぬまうとに竹

大問言一終卷一三

九

中み誘きしとわりの面、在所へ帰りけり
流布本此一段大に相違り予洲の股の舊姓某
の筆記に従ひて改削す

木下小市郎初陣高名の事

并信長小市郎へ一字を賜はる事

木下は計畧おと西方三人衆を尾州に合體させ
けるのちと美濃の侍中大りと織田家志が寄て
けり扱又その年も暮て永祿七年とありける今八早
國人大りと尾州へ歸伏して齋藤家乃羽翼となり
ひものも勢衰へ稲葉山一城のこゝにありけるは
時到来りとして三月上旬出陣を催されける由城聞て

木下同トく秋まぎはとせま左もいそと齋藤家
中をあられくとありて内變起るへくいその變はし
きうひ機は應へ急ぎ攻むを暫時は平治仕るへく
いと中を急ぎと織田殿聞入るとまは是まで降参
内附乃そのちてさく馬城出して合戦を挑むと
り今と所まとの案内者あり其の上み洲の股は要
害ありと足らぬりよし然らば何乃見合をること
有へと只速りみ出勢し一時は攻破るへしやと八
千餘騎が卒してまの洲の股の城へ入せり木下
迎へたり折角御出馬はへと城責乃と今六七十
日不と御待りるへうはと中を織田殿何乃恐怖とる

所^{ところ}りりて左^{ひだり}様^{さま}み猶豫^{うやうや}さくさくやた^い一^{いつ}舉^きみ責^せ破^やく^く
但^{たゞ}別^{べつ}の子^こ細^こりりや詳^{しょう}み中^{ちゆう}べ^いとありけるにり
木^き下^か中^{ちゆう}様^{さま}別^{べつ}の子^こ細^こもい^いもぬも今^{いま}程^{ほど}齊^{せい}藤^{とう}方^{ほう}此^{こゝ}諸^{しよ}
士^し一^{いつ}致^ちして君^{きみ}乃^{すなは}出^い馬^ば煩^{わづ}し^し備^{そな}を設^たく此^{こゝ}故^{ゆゑ}を其^{その}の
軍^{いくさ}の^りも勝^{しょう}利^りを得^えを況^{いは}や城^{しろ}を名^なに負^お稻^{いな}葉^は山^{やま}聞^き
る名^な城^{しろ}み兵^{へい}糧^{りやう}玉^{ぎよく}藥^{りやく}十^{じゅう}分^{ぶん}た^たく^く之^{この}い^いは^はる^るか^かめ^め
御^ご心^{こゝろ}の^まま^まに^にあり^{あり}や^やさ^さに^に籠^{かご}城^{じやう}年^{ねん}を越^こる^る時^{とき}に
隣^{りん}國^{こく}の^{へん}憂^{うれ}も心^{こゝろ}元^{もと}さ^さく^くい^い然^{しか}る^るに^にり^り今^{いま}六^む七^{しち}十^{じゅう}日^{にち}を過^す
し^しい^いも^も不^ふ意^いみ出^いて^て即^{すなは}功^{こう}成^{じやう}得^える^る時^{とき}に^にり^りい^い屋^や
され^{され}も^も後^{のち}の^{のち}軍^{いくさ}乃^{すなは}為^なみ^みは^はる^る是^{こゝ}も^もさ^さく^く乃^{すなは}ち^ちい^いく^く神^{かみ}
速^{すみ}み一^{いつ}戦^{せん}さ^さく^くい^いく^く神^{かみ}速^{すみ}み帰^{かへ}陣^{ぢん}ま^まは^はる^るを^を

その^{その}ち^ち謀^{まう}り^りと^とや^やと^とハ織^お田^た殿^{でん}後^{のち}乃^{すなは}謀^{まう}とは何^{なに}事^{こと}の
やと宣^{のたま}ふ木^き下^か中^{ちゆう}様^{さま}西^{せい}方^{ほう}三^{さん}人^{にん}衆^{しゆ}を^を用^{もち}ふ^ふ時^{とき}刻^{こく}到^{たう}来^{らい}
せり抑^{おさ}と^と乃^{すなは}三^{さん}人^{にん}衆^{しゆ}ハ齊^{せい}藤^{とう}家^け一^{いつ}族^{しやく}乃^{すなは}好^{この}ん^んば更^{さら}み疑^ぎ
ふ所^{ところ}を^を依^よる^る彼^か等^らみ謀^{まう}計^{けい}ハ行^なは^はる^るを^を乃^{すなは}不^ふ意^いみ
出^いて^て責^せら^らる^るみ^み籠^{かご}城^{じやう}乃^{すなは}便^{べん}宜^いを^を失^なは^はる^る落^お城^{じやう}眼^{がん}前^{ぜん}
み^みあ^ある^るへ^へさ^さあ^あり^りと^と乃^{すなは}籌^{ちゆう}策^{さく}ハ演^{えん}し^し不^ふと^とみ織^お田^た殿^{でん}
是^{こゝ}漸^{すす}得^え心^{こゝろ}を^を一^{いつ}戦^{せん}を^をあ^ある^る乃^{すなは}催^{もよほ}ふ^ふ
乃^{すなは}と^とて軍^{いくさ}勢^{せい}の^の手^て分^{ぶん}定^{ぢやう}り^りを^をさ^さる^る久^{ひさ}し^しく^く在^あ
國^{くに}一^{いつ}て案^{あん}内^{ない}者^{もの}と^とま^まは^は一^{いつ}番^{ばん}木^き下^か藤^{とう}吉^{きち}郎^{らう}一^{いつ}千^{せん}餘^{じゆ}人^{にん}二^に
番^{ばん}は吉^{きち}例^{れい}み^みま^まう^う也^や柴^{さい}田^た權^{けん}六^{りく}郎^{らう}森^{もり}三^{さん}左^さ衛^ゑ門^{もん}二^に千^{せん}餘^{じゆ}
人^{にん}三^{さん}番^{ばん}池^い田^た勝^{しょう}三^{さん}郎^{らう}佐^さ内^{ない}藏^{ざう}助^{すけ}前^{ぜん}田^た孫^{そん}四^し郎^{らう}二^に千^{せん}餘^{じゆ}

人々の次々大將軍織田殿旗本三千餘人後陣を引
 下りて佐久間右衛門尉一千餘人にて備えたりしれとのり
 色旗本空虚あり敵俄に本陣を逼る城防がれんが為るに
 此五手組の備竹中を指南せし処とてり實にや織田
 殿の備りのも四段めても五段ふくも車うりつとつと
 乃如く進放待の法ありて我佐久間の備を引分る
 甲州家みて志まうと號けし陣法に似たり
 前後の軍勢九千餘人今迄かゝる人数を出されしと
 礼を齋藤方乃諸士此度と大事の軍とるべし敵が侮り
 まちまを要害みよる敵をまち輕じきとまざりてと軍評定
 一決し先丸毛兵庫頭長井隼人三千餘騎を先陣を承たり

牧村牛之助長井飛彈守二千餘人ぬくを乃跡みはる日
 根野兄弟二千餘人ぬりぬの如く伏兵とあり扱旗本乃
 諸士もと不足ありあれを西方三人衆を催促して加
 勢とまをべしと云処へ稻葉氏家伊賀守面乃人数を引
 卒して出来り齋藤方ぬり西方衆乃加勢を勝軍は
 瑞相あれ今度の信長が打取と多年の遺恨を晴まべ
 きたりといふ勇み勇む処へ伊賀守進み出てやける我
 くハ二手み分まき合戦ならぬに酣まらるる時横鐘
 城入る突崩まきとあり齋藤方乃諸士も義尤那
 りと同一けきは氏家安藤を左のりし備を立稻葉
 と右の方み扣へり是と元より織田殿と示し合せ

軍法なるが如く知らて頼り美濃勢の運の程は其れを
けき爰に尾洲の先陣木下藤吉郎逞兵勝つて一千餘騎
静にとわしよせ敵合近くありしらは鉄炮をうちつけ
真先み長柄乃鐘りしるる兵士三百餘人烟の中より穂
先坂をろくろく突くをいその次は馬強乃武者五百餘騎
潮乃湧如く駈出さるれば乃間み歩立乃侍二百餘人鐘をひ
袂りて突立く進みまら丸毛長井が三千餘騎散り突
くりしれ思はれはと引退ざり馬より飛下り鐘を取
く突合んとする所へ木下が馬武者面もあつた駈りしれ
ら丸毛長井が兵士無二無三み駈あつたまられ右往左往り
散乱し兵庫頭隼人踏止りてあつたとくつとつせれども耳

ふも聞入に敗せしめて落行勢の中より小牧藤藏と名乗
て只一人あつたとあり大太刀が打ちあり木下勢を切て
る勝りしりまら木下が勢小牧一人み駈立らるる或は討
ま或は疾張蒙りしれみ敵りしものあつて見えしれみ
蜂須賀又十郎青山小助我討取く高名小せんとむらふ
所み秀吉の弟小市郎今日初陣乃手柄み能敵討討
とあつた懸居りりり斯と見るよりりり寄鐘が
捻りて突かする藤藏も血み染るる大太刀みりり渡り
合けり見しる浅野彌兵衛かけ来り聲をうけて小市
郎が援く藤藏もはる勇士あつたと今朝より度々
合戦み疲はれしを終り小市郎み突ふとられり

乳... 大勇の小牧あり鐘の塩首ヲ手操り引を
 入とせしる処とせしるに在せし鐘ヲ放てば小牧尻居
 ぬ倒る大太刀と抜く躍りかり藤藏が首ヲ打落すと
 木下小市郎今年廿五歳天瑞寺大夫人の所生なりて
 大閤同腹の弟乃ち大和和泉紀伊三國の主として大
 和大納言といふ是あり
 小牧討... のち長井が兵あつて合するものありれど
 二陣の牧村長井飛彈守入替る尾州方よりも柴田權六
 木下ぬか... 進... 牧村長井ぬれとみ...
 とや鬼柴田... 急み駈立んとせしれど...
 権六郎... 寄合... 過... 勿... 向へ

戦ふ者多く惣軍乱... 所へ三人衆の勢柴田の横を
 目みつけく突か... 柴田横鐘と防ぐと一所備を立
 て待向... の間ぬ牧村長井が勢へ三人衆み隔く...
 柴田み逢くと... 時木下織田殿み... 旨あり
 ... 織田殿神速み軍... 故み柴田へ三人
 衆み送られく静くと後殿して洲乃股の城み引返す
 三人衆も... 柴田追て長途...
 ... 引返... 織田と討漏...
 残念... 誠... 腹心の味方乃所為と思ひ
 ... 藤方乃運の末... 愚... 織田殿を洲股...
 ... 諸軍勢... 休息... 木下が今度乃働と拔群...

遂みその身及ぶ天の明鑒まことに恐るべし濃州の國
主齋藤右兵衛大夫龍興と無道ありとつくとも若年那
まばその罪強き責る足はせの祖父道三入道奸計
不義ありのそ一國を押領せんとつとも天その罪をゆる
さばその子義龍乃為破らま其臣小牧源太は斬る義龍
父弑せし罪天誅のうらみなりねどもはしき首領
を全して定業乃大死得たり然るも道三の不義や義
龍の悪逆と一途み報ひ来りて龍興叛く者多き齋
藤家滅亡するも時期至れりとつとつと
道三入道十七歳みして美濃國池田郡白楳の長井藤
左衛門長弘み仕ふとつり或は齋藤妙椿みはつと

云但妙椿は明應九年十一月十三日卒は道三七歳の時也
又明應五年十二月七日江州合戦の時齋藤新四郎利國妙椿の長子也同新四郎利親戦死せし利親の嫡子勝十代幼
稚あり故に白楳の長井藤左衛門長弘船葉山に住ま
る大に助けとつり道三いせと十七歳の時と云
永正七年のことあり享祿三年道三二十七歳藤左衛
門夫婦弑し船葉山の城を奪ふ長井一族是を討ん
ことを謀るも土岐頼藝とよび近江の佐々木定頼
道三に援けて刺長井の後として長井新九郎と改め
しむせのち土岐頼藝の妾の妻として義龍が生
まむ但義龍實は頼藝の子あり義龍三十八歳ふく

卒とてしを大永四年ふ生れしと云く其の子の龍

興今永祿七年廿三四と知る

然れども龍興のれがまふ日夜姪酒まふけり民百姓の苦
患が思ふ我身の榮耀とことと明し諸士が撫育ふまとも
つら果しと諫むるもの多くあるを乃倒るが待じ
々無墓々れ西方三人衆の去年織田殿へ見衆としより
表への齋藤家合体の色が顯るを内心中の専尾州一
味乃謀めりしといふもして忠實織田殿まはくると
企けるより洲股乃木下と謀り合七寂寄く侍と招
きける不ども今の二國乃武士大概木下と音信が通し好
を結び懇し語合やうにありし今叔と木下謀が案し

出三人衆ふかりしと云く合とて三人衆

その意がえり齋藤家乃諸士と集會をり評定しけり
と洲の股に敵城が築くを以来尾州勢洲の股を足
溜とありて國中に勢が出戦を挑むるの間ふ一村一
郷乃諸士が語合ふが故に旗下の諸侍もようせは木下と
計らるべしおるえは然まらざるは是が防ぐ用意を
せは叶ふべしと云は日根野長井牧村九毛尤の義那
まども防禦乃用意別の思案をぬるは三人衆の異見が
承るはばやと云はる時稻葉伊豫守やち稻葉山一
の所乃兵士が出して山下より町口の間に住居させる
と近在近郷を尾州勢乃放火する時神速に馳むる

蹴散らさし便よろるべしとの外乃侍衆を城中に籠り
あつ敵のあつ方へさむらうらり面くは領地く
不在住さすを以て尾州勢乃川を渉るやいるや乍し待
迎えく討散しいさうも足は踏させど織田信長い
うみあつ共進むこと叶ふはゆその閑み洲の股乃城を
竊み焚打こせば尾州勢いうも猛とも當國に向く馬は
いさうと能くはせれり彌軍士は訓練して時お伺
ひ尾州を責従へるは孫吳が秘さし所漢家屯田の良
策といふはと勧めけまば丸毛日根野いさうも當城
乃如き要害堅固乃城中に多くの兵士徒ら住居せん
うる乱世ふく可然手便ともあつるは山下の所く

み在住し近郷近村不出張し敵乃乱妨は防らんとも尤可然
覺ゆと衆議一統せしかば大将龍興とも悦喜ひ是急り
尾州勢は挫き計あり早々の用意はなすべしとありし
不ぞも城中の若殿原半も過る城は出山下町口在所に
分散し組は分ちられはまた又山下の麓に陣營
を構日根野兄弟を差置諸方一緒相圖は定め何時や
いと互に相救ふる約束は嚴重みましければ今迄
城中三万餘人乃兵士らつらみ六千餘人とありその外足弱
老人幼雅のもは加えり一万餘人と着到をその時三人
衆も謀らく山下乃町人等ら富有の者多し急變り
臨ぶ財室を失せんと尤憐べしと信し入城せしは

彼者共ありて思城を以てと勧めける不ども其の月も一
 議み及む可然とありて悉く惣構乃内へ呼入りかば却て
 城中の人数ハ三万五六千及べり逞兵勇士散在せし無益の
 匹夫匹婦と入替結句兵糧とをやく弊盡さしめんと謀りし
 知ざりける齋藤方の諸士乃心の内を哀れ丸毛長井日根
 野らんとて世に聞えたる名人勇士も三人衆みまゝされて
 惣構の内をりける兵糧藏と本城との間に隔りて
 運送のいと坂町人共打任と勤させ矢玉藥との外に兵
 具を所く乃持口へ引分遣しおのりて城中ふり少く邪
 つのきども斯くて防禦乃便調ひいと悦び勇ぞ愚かれ三
 人衆をかやりに齋藤方を謀りまゝぬりて洲股へ住進せ

かは木下まゝとて物聞出でて是故さうせけるも三人
 衆のやう状と少くも相違ありて藤吉郎は清洲にお
 参上し織田殿の御前み出て此年月は心を告ぐりひける
 美濃國乃躰くありの上へかく御馬が出され速に征伐
 ありて彼國平均をせしめられ然るべしと言上るまじき織
 田殿大に悦ばせられ敵の容子いやくみ成はるふやと尋
 るふみくろ稲葉山の手配り備立の様を言上り三人衆
 乃内通のわしむさ落をもくや出たて御出馬の様を先
 以人数千二百名と川へひてく洲股へ入させよふべし某
 そのも乃共と所くみ埋伏させ置君ふの某が言上り
 日限違へ玉を以御旗本をりみて爽み出馬のしに城責

とてかうくと言上りてこれ小笠原以と大魚とを得る計策なり
りと受けまは織田殿席が打ち勇とあり鬼神不測の妙
術と云履一奇代の智謀比類なくと大ふは感ありと
やく此謀は行ふと命せられし不ども木下取早
片時も猶豫まじき時ありは但御人数を夜の中みくら
出するは様は沙汰あるべし君の由出馬も二三日は過べ
くは波國乃御手み属せん十日は出まされぬとや
く木下洲股へかへし織田殿増く喜びありそ乃夜
より手組らりて五百七千不ども分らる森池田
坂井佐々前田を大将として忍やうみ洲股へ入りは
る木下との手くの大將もみ謀は示しは案内者

と付て洲股近郷に埋伏させしる兩夜の内は八千餘乃
人数と其所彼所と忍をせり扱のち三人衆乃許へ浅
野蜂須賀兩人が使者として再應の計議を談ししるの
ち木下の勢の内より物馴るる兵士五百餘人と撰らる
梶田隼人稲田大炊日と野六大夫と物頭とし忍びし
ふ三人衆のゆえ遣らる三人衆は彼五百餘人一面
の勢を加え稲葉山へ使を立しり様洲股へ夜討仕る
存は但勢少く不足は天晴に加勢のつとと訴へし不
ども龍興何の思慮も及むは城中より七千餘人三人
人衆の許へ加勢よその出されり三人衆は此由と聞
て謀成就しりと悦び其の始末を木下へ申達しりるハ

秀吉かざりたる悦び直之清洲へ使者遣りて明日
 手合と決定仕間今夜中御出馬然るべしと住進セ
 しかば信長叔父とて勇立るゝひ弐田林丹羽佐久間の
 老臣等と共に五百餘騎卒してそ乃夜ひそるゝ洲股
 え赴き木下秀吉迎なり三人衆乃手筈具
 言上しけき稲葉山の落城明日と過へり候を宣ひ
 そ乃夜を例よりまろよく諸士に物賜りてほしくけり
 三人衆かりし洲股城を責る事
 并織田勢稲葉山を取圍む事
 信長洲股へ着陣まろく木下手勢五百餘人引
 引分る大将乃御勢加たり都合一千餘人少て密り洲

乃股出閑道より瑞龍寺の麓に至りて埋伏し
 瑞龍寺ハ稲葉山より齋藤越前守利藤入道大年
 妙椿大居士應仁元年八月天台宗の善跡に轉まり
 されと立土岐成頼乃菩提寺とて悟溪和尚を開
 山とせり
 洲股ハ竹中半兵衛重治をのち置ける重治今まで
 美濃攻のとき不於六一言に發せられも木下が神策に
 感嘆し木下りのあせし三百餘人の兵を城中所く
 引分る大勢籠りし体をまろく防禦の備せられたる
 くを見せけり候も三人衆ハ加勢よ来りし日
 根野兄弟が陣ふり候今夜急み洲股に攻入へり候

語らぬ一六日根野兄弟の謀實も然るべく存すれども
 初まぐ四年六月のうへ持固め一城以まゝり容易打てり
 攻落まらばやと猶豫の氣色見え一六稻葉伊豫守らざ
 つゝひ四年のうへ持固め一城がうへて攻落かゝる
 五年六年と成後ハいつて打落しヤけらるべしとてハ城の
 落るためハあるはどにあり抑軍乃道と奇計と不用意
 を討し利あるもの比洲の股乃要害成就と後一度も味
 方より責しとてまゝに防く手便ら油断なれども
 さる所え大勢より暴ふ打入たればさかむ一狼狽さる
 らんその上大河なるを浪高尾州より急よ救ふ
 としも叶ふや一鹿あは山を獵師が軍と某に任せ

まくと荒言していつて夜討し決定せしかば日根野兄弟も
 其乃義も同じり時稻葉が差圖少く三人衆の勢三千餘騎
 の中より八百餘騎を勝りて日根野を陣よのこし置牧村牛
 之助が手の勢千餘騎と日根野兄弟の勢乃中より八百餘
 騎がまゝり出都合四千餘騎と二手よ分る先兵糧は
 多し七丑の刻過る比洲股へ押寄たり左の先手ハ稻葉伊豫
 守右の先手ハ氏家常陸介城ちりくと寄るやのまや鉄炮
 と打懸関を作り只一時責入らんと探りけり城中よ
 ろは竹中半兵衛三百餘騎より防げども思ひ寄らざ
 ることなるもてあぬてぞ見えたりも稲葉
 氏家乃手の者堀よ飛入堀よ取付無二無三小乗入を休

と見え、牧村が勢を継ひて乗らんとしてせよとて三人衆
乃兵士の支へられ但見物して居たりもや、兎角は
内は稲葉氏家の先鋒とや城中にあり入りて旗を立てて爰
と先途と走り廻る日根野兄弟も山中に陣所を居たり
待た心えたり、某爰に残るべし、彌次右衛門は州股下至
り三人衆をみりてややとて五百餘騎を走り来り
見まばや城中へ乗入るとみえたり所は稲葉の旗と
立ちり彌次右衛門軍が賀して悦び居る所は木下織
田殿と共に瑞龍寺の山乃麓よりりて洲股の体と伺ふ
時分とてと云ふとせよ、所は山上よりありて合圍
乃狼烟を上るとひとしく爰より埋伏し置る尾州

勢八千餘騎は美濃侍乃降参せし者共六千餘騎との外洲
投近郷近在の地下人共都合せし勢二万五六千餘騎八方よ
り起立齋藤方の兵士の分散して固然たる所は町口迄鉄
炮火箭をときむしく射りけ攻立たると思ひしこと
これと防く手便に失ひ一支を度得た只落支度城乃
ゆるりたる所は八方乃山々峯々手炬松を燃し其
勢幾千万といふことを知りて國中より尾州勢をぬれ
毛ぬりたるは一本丸を引入る後のことよとてつと
ぬれぬ城に入るとして所を織田勢爰にこりり
出て攻め申すも夜はいと暁がとつり人顔おろろ
誰とも知れず味方の敵と見贖ふべく己が様く落失る

日根野備中守もその不意に驚きいづれとほしとありし
所は三人衆乃のこせし八百余騎の兵共皆落失て今ハ纔
よ馬廻り二三十人過ざりけむ山中と引取り惣構
乃内ふ入る防んと心ざし引処へ左の方より池田勝三郎
坂井右近三千余騎あてお寄り是と大事の敵と見
内より右の方より森三左衛門前田孫四郎三千余騎より
押来るその跡は佐内藏助梁田出羽守福富平左衛門二
千余騎より山下やぐり續き其外當國乃侍中より
尾州へ降しとみえ日比見馴し拮据ちてし梅
鉢乃旗馬をくくは押立二勢く凡一万二千余人猛火の
燃る勢とやうく責寄は勿くおりてと向べくもはし又

四方の山くもに續く旗乃數夥敷とてしをも愚あり
ける所は大澤次郎左衛門我手乃者も當國勢は合せ五千余
騎洲乃股と稻葉山の間へ打く出く備と立ま三人衆と
牧村日根野彌次右衛門かの山とと隔てらむ救ふ手便
と失えり織田殿を山上よまし木下八山下所くの民
家も放火して焼立る不ど日根野備中守も知らくして
惣構乃内へ引入はせども敵透間とてしを来れバ防ぎ戦
ふん様もろくあそびたまふて但茫然とる所へ彼八百余
騎の兵どもと木下が手乃五百余騎梶田稻田日比野はと
とめとして内より切らる今迄味方ふありしもの
共らまは顔を見知り追はらる戦ふるどふはしも乃

日根野備中守あはくはひかくてハ龍興乃こと心えそ
 とく早ニ山上へ引入たりされ木下と三人衆の兵士を
 味方の内へ混々置けは思ひのまふ案内は知ま
 故そしそののち彼千三百人乃者共兵糧ヲ籠置一庫
 の構ニ至り奉行人切殺しまは是を奪ふと又洲股
 此城とば三人衆の手まゝ責落るゝ加勢小向ひ一牧村
 は手小柄な況や日根野彌次右衛門と義勢とより小
 居る所小稻葉山の烟とみまゝや引返さんとする
 小路次の敵兵支えけまゝ勇力とまげぬて切抜く
 主従わづら十騎をより小打まされ散く乃体まゝ稲
 葉山へ引上る是を木下が謀まゝ退く敵とハ追ひ追はし

其手乃大将とハ無事ニ城中へ入らしめよと下知えはめるこの
 故よりはれハ彌次右衛門も牛之助も道まゝ度ニ危き
 軍ニ出合ひく隔らまゝ漸二十騎をより引卒して
 喘々城乃中まゝ籠る斯く後ハ稲葉伊豫守氏家
 常陸介安藤伊賀守の三人も静小洲股の城を出て瑞龍
 寺の寄手小加る屋とて己が一勢く打立たり

重修真書太閤記二編卷之十四 終

重修真書太閤記二編卷之十五
織田勢稲葉山城攻難儀の事
并竹中半兵衛義心の事
永祿七年八月朔日織田殿美濃國不出馬りりて木下藤吉
郎が智謀みよの暫時み稲葉山乃城下みお寄總捕
取乗取數万の大軍を以て稲麻竹葦の如く取かたき只
一日乃内み攻落さるる一と勇まれお所へ稲葉氏家
伊賀守の三人洲の股竹中半兵衛守らせ各々手
勢引率一織田殿の本陣へ参向一責口以受取て一
攻せむる一と言上一もあまは信長大きより悦びよみ

重修真書太閤記二編卷之十五

織田勢稲葉山城攻難儀の事

并竹中半兵衛義心の事

永祿七年八月朔日織田殿美濃國不出馬りりて木下藤吉
郎が智謀みよの暫時み稲葉山乃城下みお寄總捕
取乗取數万の大軍を以て稲麻竹葦の如く取かたき只
一日乃内み攻落さるる一と勇まれお所へ稲葉氏家
伊賀守の三人洲の股竹中半兵衛守らせ各々手
勢引率一織田殿の本陣へ参向一責口以受取て一
攻せむる一と言上一もあまは信長大きより悦びよみ

大開言一編卷十三
まの三人城近く招呼を此度洲乃殿攻のたゞし後拔群那
りと賞美せられし三人共一同ふ是全く君の高運みら
き木下ら智謀其機も當まる故めていと申請し一向責口の千
配を望む信長即味方の諸士を分る其前後決定りゆふ
但嘉例あらればとて一番柴田権六郎勝家二番み稻葉氏家
伊賀守三番池田勝三郎森三左衛門四番み坂井右近前田
孫四郎五番み佐内藏助福富平左衛門六番み林藤八郎中条小八
郎七番み名古屋彌五郎平手監物村井長門守林佐渡守八
番み築田右近九番み青山甚太郎十番み大澤次郎左衛門木下藤吉
郎とありかくのどとて十隊み組分同日己刻りの稲葉山乃
本城責せりたる此時城中み大将右兵衛大夫龍興とて

あつとと思ひもて先日三人衆の勧めふりて城兵を
爰彼所み分て防禦の備へと固く志はまはるる恐れ
氣遣ふとてとて心緩く近習者集り酒飲取乱
たる所み今朝りの敵寄来りて山下城々々々鉄炮の音夥
くきとらえけるみ驚き恐きまはるる如何とあるとてゆるん
とつとれ果忙然たる所え牧村日根野とてゆるくの体みて
走返り國中大なる敵とありゆ共此城堅固みりけは容
易く攻落さるるともいほはし其上爰み籠る兵士ハ忠義鉄
石の如く一人當千の者みれば必死城極めとて防ぎ戦も
み廿日三十日城過さると安らげし其内ふ敗軍の味
方を氣取直して追く走集るべし又江州の浅井備

前守長政主君と親しむ縁者ありては聞捨みいふ
はれまよし定りて後援ありべし

浅井備前守長政を下野守久政の長男よみて今年ハ廿歳
あり長政の叔母近江御前と云ハ備前守亮政の末女久
政の妹齊藤龍興の室家乃由浅井記ふみえしり

兔角日城經る不どあは尾州勢を退屈して必定變城
生れべしと謀定り諸勢を勇めて持口を固り鉄炮矢
石城十分みりぬへ防く不どふ龍興聊勇氣をげし

日根野長井丸毛牧村ハ二丸ふ出く防ごま時み織
田方の先鋒兼田權六千余騎あは進めらその跡あり
三人衆の勢三千ありみり引續との次ふら段み備へ

先陣利なくハ入替らんと雲霞乃如くみ詰寄り城
中よりハ石弓をもちあは箭射けけは透間あは
寄手あはれ一矢み二人ハ當る共仇矢を更みぬりなり
一番二番戦川くきしと見ゆるぞ三番四番の軍勢ハ入替
らやや云不ど日ハ西み傾きけるみより夜軍を詮那
くるをしとして心あはれとも寄手麓の陣へ引返せば城
方より競ひくるみ及むは翌日早旦より短兵急り操
り月礼とも名み買要害の地あは寄手嚴しく責
まきも落べりもみえむその日もむはしく退きける織
田殿案み相違乃城の様やと氣をいりちるみ本陣を城の
麓まで引移り自身あり立下知りありといえども三

日めあもろ落し得めら城の中矢玉藥澤山田して弱る氣色
あけきつ夫喰城守る時ハ方卒當り難しと云語今も思
ひ知まくり

道三義龍二代の間み籠城の糧料十分不貯はし城思ふじ
織田殿此体はみろひ窮嵐かろ門く猶城守といろり力攻り攻
まへ入敷の損とて益とつる下此上ハ如何なる術攻以て攻る
ろやと評定有けろ大澤木下進み出某等城攻懸らばら
一攻攻中へさろ孔共此三日の如く攻はさる勝利有べくも覺え
たげ無益のしとふ士卒疲勞せんより暫く責口は開げ能勝
利の圖計り其後攻入様お仕らんと存いさつろふハ二兩日攻
口は猶豫有べきと申ふど信長も城攻功者の木下が中条故

あるべしと思ふれが即責口は引退く諸卒み戦は罷て休息
と一先其後信長何とのおろしめし竹中重治を召寄玉
ひ貴方ハ當國乃住人あくま乃城不久く上下ろ一門を
城の案内知はるるいゝる方便はめり責は此城落へや
思ひ寄しとてとつるやとありけるみ重治承るや
某十七騎あく此城は奪ひしとてを以て左思召ひける屋
きりれども籠城乃術は攻撃乃謀り人智互み切磋
乃上ろるば一應急忽の了見や上ろるるかと答やけを
織田殿よあも不快の氣色なぐる重治が詞いふも毛子細
らるべしとおもたるも熟く思案なるといふ近き年の
しとなれり重治まはしく龍興は追出して夫乃城を

奪ひしともあり然もつづめ人数おのこのとり城
 攻奪ふこのちたぐみ十七八人みく籠りしをさお龍興
 攻落し得けりとは是全く地の利乃ら後しき故あり
 然らば只今龍興千余人みく籠りしを斯の如く推
 詰り攻るお落し得ざること實あり其理明らかあり但
 攻撃乃謀あるべしと定りく秘中の秘計ありと
 是尋ねる方便しとと思惟せらるる再城攻のことお仰
 らしむ先休息しと陣中おとら置疎意なく饗
 應しむひたり

流布本重治問答後人推量の説おて取おとらげ今或
 人の記およりて改作又遁甲式およるお稲葉山は

洲股乃良おり洲股お稲葉山乃坤おありるお月上
 元良お丙奇あり坤お壬將泊お壬水丙火お克を理
 たるおしお重治お詞を隠しおて信長お熟思せし
 所以あり

秀吉主従七騎間道へ赴く事

并 堀尾茂助深山乃猛獸お狩事

稲葉山乃城堅固おして籠城の兵士亦武勇絶倫おるお
 りの寄手損亡多くおして三日を経るとおとも落城
 お及おは竹中重治お召く其謀を需らるるおしお隠語
 おしおたしおるおは美濃お名お得し侍と云
 奇謀妙策心中おありおるお多聞おたおるお容

易小語を教ぜざるものと思はれり。木下小尋聞べし
と宣ひし事。木下亦詞に工おしてその意を探る。こと
して其乃大概に悟り得。くは人の疑ひたりの事。其
慮り重治に向ひ當城何ぞ堅固ありとも國中只一
城乃とありその上兵糧玉薬多しと云も城中自然と
生るる物。其乃はまじ日數経るうちおもしろの月々盡
期もあらず。寄手かく大軍を礼を只圍んで長陣を籠城
此士は疲る。あは城中を危急に迫り大将必死の期とある
る。元來當城を圍むと龍興主の無道に戒め民の困
窮を救ふ以て本意とす。兼く貴邊と約束せし龍興
主の命請ふ。ひみ齋藤苗字相續のこと今日も窮なり

されども三日の間攻り移る。此方より手に入るとも言甲
斐はし何卒して二丸を攻取て詰の城乃一段みちる。時變ひ
を入ると存付てし。どもその道筋いさう不審の所。貴
邊を此うさう乃と定めて委細に知し。食料も仰
願なく。其荒増に語りて。と尋ねし。重治を止と
お得。長良の道を示しけり。音山中。水の用。意。一。流
布本牧田の道と云然まじも我乃れを美濃人みきく
小稻葉山の良乃方長良川の流。一条の樵路。乃られ
永祿中木下藤吉郎の襲ひし所と云
木下歡び急ぎ我陣所おくり。淺野彌兵衛をまよめ。我
明日此城の一番乗。おせんと思ひ立り依る。當陣のこと。小

木下小尋聞

一

市郎秀長しやうりやう長ながふふままららささるるささりり汝なんぢらら他たくく補佐ほさして諸士しよしが合あ期きせせししてて本意ほんいの如ごとく城中じやうちゆうふ入いららばこの歌うた筆ふでが竹たけの結むす付ける印いんふ立たちたちたちたししをを見み次つぎ弟あに速すみふ責せ入いれれと謀まをははししてて後本陣ごほんじんに同どう公こうし大將たいしやうに荒増あらいそへが言い上あがり蜂須賀はちすけ小六せうろく同どう又また十郎じやうらう梶田かぢの隼人はやと稲田いなだ大炊助おほひのすけ青山あしやま小助せうすけ日比野ひびの六むつ大夫だいに少せう共ともみみたためめりり七なな人にん兵粮へいりやうを腰こしにに着つけけしし中なか渴水かつすいの用意よういにに一いつ瓢ひょう乃飲ののが背負せおひて八月十三日はつがつじゅうさんじつの申まを乃刻のくり長良ながらの道ちゆうへ趣おもむききり秀長しやうながと浅野あさのとと役所やくじよをを持も固かめめりりかかの合圖あひづの歌うた筆ふでが今いまややくくととままらら居ゐるる木下きのしたととりりの長良ながらの川筋かゝさしふふくくたたととくく往やららせせしして瑞龍寺ずいりゆうじの峯たけははくくふふ城じやうの良りやうののふふ出いででささららふふとと思おもふふ路みちをを尋たづねね出いししかかもも峻たけ岨そ言こと

語こと不絶たぎり登あららんんととままらら鳥とり乃翼つばさをを下くだららんととおおりりも鹿かの蹄ひづりをを人ひとの目めにに見み合あははししとと云いははれれしし神かみ變かへりり不ふ思し議ぎの早業はやわざ人ひとは勝かちまま下くだり木下きのしたななれればは枝えだののふふりり巖いがが傳つたひひ釣つり繩なわととままげげくく階か子こふふ代しろ兔角うさつかくして一段いつだん平ひらなるる所ところへ攀のぼりりままらら兵粮へいりやう月つきの酒さけををののままにに休やす息みををししるるふ折おりりも十三日じゅうさんじつはは明あららりり見みええらられれししふ面おもて白しろき氣色きしきややと人ひとの興きよう入いりりけけるる所ところは右みぎの方かたなる谷間やまのま俄たちににささしして聞きええししるるややややかかるる深山ふかやまと云いははれれ中なかににかかりりととりりのの人ひと乃な来きるるへへささめめらられれ物ものはは驚おどろろきき孤狼ころうの由よし処ところが替かへへりりふややと大おほきき岩いの有ありりけけるる小楯こたてふふととりりと見みええらられれしし小牛こぎう不ふととらられれ猪手しゆで負おたたるると

みえ木の根岩角の嫌ひなく猛り怒りて駈来る其跡よ
り一箇の壮士大に叫ひて猪を呼ぶ
木曾の山中に猪を獵しと聞ふ既み手負へ後猪
駈出へ逃げ狗追うけとあれと聞ふ狗人其聲を懸ら
ず時へその力大に陪せりとうや今茂助の聲が止し毛
必狗小力が添へたる處へ

七人の衆いよく不審されやらあつる山中に猪を追入る
音もたれ尋常の獵師ふくあつはじいみも子細あつるを
彼岩の上のりて見れば彼男飛鳥の如く悪所を云
去飛越へ走り来る猪は是れ怒れ増えいよく牙を鳴
く彼男も飛くるとまると彼方此方と身を替へ是れ

遣違へ透け伺ひ猪の脊中小ひらりと乗と猪は後落さ
と岩角樹木小身を摺付跳廻る蜂須賀又十郎若者も上常
小山中に走り廻り廉狩を好む猪を討留く彼若者の
助とやと云へ故木下押留大事乃前の小事とて我ら與
しとてはとて動くはあつと見る内小彼壮士右の手
小山の根に持身沈く猪のやうに強くさや突通へ力
み任へ穿へぬはしみの猛猪も急所の痛手小弱りける
あやうらめを叫んで其まゝにまぬ倒さる然も彼壮士も息
絶へあやあらん同様め倒さる起るやうに木下是れ
見く彼壮士の舉動凡人とわらふもさうやくも勇士と猛獸
と共に斃まつしむると不便とありと岩上より下下くく

見乳の猪とハ仕留はせしと左の子猪の尾先を握詰りし
惣身の力腕を凝りしと見へく放さずまればも放さず我れ
あきれ果て居りたり漸に氣緩く腕直り立上り七人
乃衆怒り大に驚きいりり人あはれとて見へたり
此男ハ別人なり尾州岩倉の城主織田伊勢守信安小仕に
堀尾忠右衛門の子茂助と云ふものなり

流布本織田伊賀守信昌と書誤り岩倉の織田と云ふ
津田權大夫親眞十五代津田三郎敏定文明三年越前より
尾州に移り丹羽郡岩倉の城に住して丹羽春日井海士郡の
成敗を執行す敏定の弟彈正左衛門信定の海士の東郡勝幡
乃城に住す信定の嫡子信秀是信長の父なり敏定の長子大和

守敏信其子三郎左馬助信安後ハ伊勢守と云四十五歳にて捐館
後信長の父小岩倉ハ失ふ

岩倉の城落後ハ堀尾親子當國不退き民間に交り居り小父忠右
衛門ハ去、年病死今ハ茂助一人と成血氣の盛成り山野に馳廻り
猪鹿猿兔杯を討止せ世を渡す芥とはは共尋常の獵師と同
待卧小之とを嫌ひり山路に分入て猛獸良禽を取て善價り
くはるが今宵たつた木下が目懸りしとあやふく茂助ハ
甫庵本ハ堀尾茂助吉晴の生所ハ尾州上郡供御所の人小父
中務少輔吉久と云國人三十六人の内小父上四郡の沙汰知人也
茂助童名ハ仁王丸と云り伯父を修理亮と云岩倉の軍十六歳
の時と云十七歳の時茂助と改ると云り又或説ハ童名仁王丸

垂 擲 田 鳥 居 茂 垂 以
 郵 使 曹 福 井
 甘 多 舞 也 片 お 可
 心 眞 福 新 の 水 が 他
 仕 太 閣 記 始 終 有 之
 可

重修眞書太閣記二編卷之十五終

小太郎と改め木下小仕つらは木下の従五位にて筑前守を
 改め時茂助と改め共云始は木下中なかつらと織田殿小仕後まゝ木
 下しもに従共云或は織田殿の作狩しやうしゆのとも大なる猪と組で終り
 是こゝに殺らるるに覽らんて名を尋たづふひ小堀尾茂助と答
 たりしに直ちかに家人けにを召よかえらまは足輕大将あしけたいしやうとなされし
 共云何なも定まりたるぬとまうとど慶長十七年六月十七日
 卒す九歳くわおと卒すと云ふ因よて推おは天文十三年甲辰きんくわんの生なみて十
 六歳じゅうろくの永禄二年えいりくに己未きみたるまゝまら岩倉落城いわくららくじやうの年としあり然しから
 今年ことし永禄七年甲子えいりくしちハ廿二歳にじふにの時ときと知しる

